

あの戦争を忘れない

戦後60年を迎えた昨年、戦争体験者の「二度と戦争を繰り返してはならない」という強い思いにより、戦争を次の世代へ伝えようと戦後60年事業に取り組みました。8月、実行委員の皆さんにより「戦争の記憶展」「戦争体験を語り伝えるつどい」「戦争と平和のシンポジウム」を開催。昨年末、これらの事業を一冊にまとめた「記念誌」が発行され、約100冊を頒布しました。

戦後60年事業の「戦争の記憶展」にたくさんのお出しの品を提供してくださった渡邊岩男さんと、田引隆さんに戦争への思いをお聞きしました。



【父・熊太郎さんの思い出の品を提供】

安部居 渡邊 岩男さん (58歳)

幼いころから、盆や正月に親戚が集まると、戦地での悲惨な話をよく聞いていました。陸軍軍曹だった父親も、多くの戦友が弾に当たって死んでいったこと、ビルマで伝染病のマラリアにかかって生死をさまよったことなど、生々しい体験を話してくれました。戦地で記録用の紙がなかったため、落とし紙(トイレトペーパー)に綴った日記や、マラリアの薬が今も残っています。

父親がいない家で、田んぼをしながら、子どもを育てた母親は、「明日どうやって生きていくのか」という毎日だったようです。食べる物がなく、子どもに栄養をあげるために、自分は我慢していたと思います。今の日本は飽食ですが、子が親を殺すなどの事件もあり、「幸せビンボー」(本当の意味で豊かではない)だと思います。



▲起床に使われたラッパなど

【父・市治郎さんの思い出の品を提供】

河原 田引 隆さん (59歳)

提供した品々は、たんすを整理していたまま見つけたものです。特に、国旗の形をした千人針は珍しいと言われます。お風呂から聞いた話では、親父が出征するとき、日野町内を回って、たくさんの方にひと針ひと針、糸を通してもらったそうです。

戦地では衛生兵として働き、帰還しました。私が24歳のとき、親父は63歳で亡くなりました。戦争のことをあまり話してくれなかった。戦争のことをあまり話してくれなかったし、私も特に聞きませんでした。私は戦後生まれなので戦争のことは分かりませんが、残された写真や人の話から、当時の様子が想像できます。家を守っていた母や祖母が、一番苦労したのではないのでしょうか。

私にとって仕事の先輩でもあった親父は、人に好かれる人間でした。今でも親父を尊敬しています。



▲国旗の千人針



今年も8月に、戦争に関する行事が町内でも開催されます。この機会に戦争を振り返り、戦後がいっまでも戦後であり続けるよう、私たちに出来ることを考えてみませんか。

■第19回「日野と太平洋戦争」展

―物や写真を通して―

戦時中の生活を伝える―

- ◆とき 8月1日(火)〜31日(木)
- ◆ところ 近江日野商人館

■戦争体験者の話を聞く会

- ◆とき 8月12日(土)
- ◆ところ 午後1時30分から 近江日野商人館

町内の戦争体験者による戦争のお話
※「戦艦「大和」の生還者証言」の
ビデオ鑑賞

■反核平和の集い

- ◆とき 8月9日(水)
- ◆ところ 松尾公園
(主催 反核平和の集い実行委員会)

■戦没者追悼式

- ◆とき 8月18日(金)
- ◆ところ 午後1時50分から 献花や追想を行い、戦没者の霊を追悼するともに恒久の平和を祈念します。